2026 年度

# 神 戸 女 学 院 大 学 大 学 院
# 音楽研究科 修士課程
# 入試問題

## 解答例
## 出題意図

## 【西洋音楽史】

神戸女学院大学

本資料に掲載された解答例の内容について
許可なく転載、複製、改変、再配布することを禁止します。

# 解答例・出題意図

【注記】
以下に示す解答は一例であり、これと異なる記述であっても、設問の趣旨に沿い、音楽史上の妥当な内容が適切に説明されている場合は正答として評価する。

## 1. 大学院で特に学びたい作曲家について

### 解答例

（省略）

### 出題意図

受験者が今後研究対象としたい作曲家について、基本的な音楽史上の知識を有しているかを確認する。また、作曲家の活動地域、創作ジャンル、主要作品、様式的特徴を関連づけて理解し、自らの研究関心を音楽史的な文脈の中に位置づけることができるかをみる。

## 2. 音楽史用語

以下から 5 語を選択して回答する。

### 解答例

アルマンド

フランス語でドイツ風、を意味する舞曲。2 拍子、4 拍子系で中庸の速度。バロック期では、鍵盤楽器組曲の中で 1 曲目や 2 曲目に置かれることが多い。

ヴィルトゥオーソ

イタリア語で名人を意味する。19 世紀ロマン派において特に、超絶技巧を難なく演奏する演奏家を指す。パガニーニやリストが代表的な存在として挙げられる。

幻想曲

作曲者の自由な想像力によって作曲された作品。主に器楽曲。ルネサンス期から登場し、即興的な性格を持つもの、決まった形式によらないものなど、様々なスタイルがある。

モテット

中世以降に発展した多声声楽曲のジャンル。特にルネサンス期には、主としてラテン語の宗教的テキストによる重要な教会音楽の形式として発展した。

パレストリーナ様式
16 世紀の作曲家パレストリーナに代表される教会多声音楽の様式。滑らかな旋律線、模倣対位法、慎重な不協和音処理などを特徴とする。

アリア
オペラ、オラトリオ、カンタータなどにおいて、登場人物や歌い手の感情を旋律的に表現する独唱曲。一般に、物語を進行させるレチタティーヴォと対照的な役割をもつ。

ネウマ譜
中世ヨーロッパで用いられた初期の音楽記譜法。旋律の上行・下行などを示す記号から始まり、のちに譜線を伴う記譜法へ発展した。

ノートルダム楽派
12〜13 世紀頃、パリのノートルダム大聖堂を中心に発展した多声音楽の作曲家・音楽家の一群。レオニヌス、ペロティヌスなどが代表的で、オルガヌムの発展に重要な役割を果たした。

レチタティーヴォ
オペラ、オラトリオ、カンタータなどに用いられる、言葉の抑揚に近い歌唱様式。物語や会話を進める役割を担い、アリアと対照をなす。

リトルネッロ形式
同一または類似した主題部分（リトルネッロ）が繰り返し現れ、その間に異なる楽想が挿入される形式。バロック時代の協奏曲やアリアなどで多く用いられた。

絶対音楽
文学的物語や情景など具体的な標題を前提とせず、音楽そのものの構成や表現によって成立する音楽を指す概念。19 世紀の標題音楽との対比において重要となった。

芸術歌曲
詩と音楽を芸術的に結びつけた歌曲。特に 19 世紀ドイツ語圏で発展し、シューベルト、シューマンなどが重要な作品を残した。ピアノ伴奏も詩の内容を表現する重要な役割を担う。

国民楽派
主として 19 世紀後半、各国の民族的・文化的独自性を音楽に取り入れようとした作曲家やその傾向を指す。民謡や民族舞曲、歴史・文学などが作品に取り入れられた。

## 出題意図

西洋音楽史を学ぶ上で基本となる用語について、単に名称を記憶しているだけでなく、それぞれの意味、時代、ジャンル、様式的特徴などを簡潔に説明できるかをみる。

## 3. 作曲家による作品ジャンルの音楽的特徴と歴史的意義

以下は、解答として想定される主な事項の例である。すべてを網羅することを求めるものではなく、音楽的特徴および歴史的意義について、具体的かつ適切に説明されていればよい。

**解答例**

(1) ベートーヴェンの交響曲

音楽的特徴

- 古典派の交響曲の形式を継承しながら、作品の規模や表現力を拡大したこと
- 動機を発展させ、楽曲全体を有機的に構成する手法
- 強いダイナミクスの対比や劇的な表現
- 管弦楽法や楽器編成の拡大
- 《第 9 番》における声楽の導入など、交響曲の枠組みを拡張したこと

歴史的意義

- ハイドン、モーツァルト以来の古典派交響曲を発展させたこと
- 交響曲をより個人的・思想的な表現を担うジャンルへと発展させたこと
- 19 世紀以降の交響曲やロマン派の作曲家に大きな影響を与えたこと

(2) ストラヴィンスキーのバレエ音楽

音楽的特徴

- 《火の鳥》《ペトルーシュカ》《春の祭典》などの主要作品
- 鮮烈で多彩な管弦楽法
- オスティナートや複雑なリズムの使用
- 不規則な拍節やアクセント
- 複調など、伝統的な調性とは異なる響きの使用

歴史的意義

- バレエ・リュスとの関係と、20 世紀初頭の舞台芸術との結びつき
- とりわけ《春の祭典》にみられるリズムや管弦楽法の革新
- 20 世紀音楽、モダニズムの展開に大きな影響を与えたこと

(3) プッチーニのオペラ

音楽的特徴

- 《ラ・ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》などの主要作品
- 親しみやすく表情豊かな旋律
- 登場人物の感情と密接に結びついた音楽表現
- 劇的効果を高める管弦楽法
- 場面や人物の心理を音楽によって描写する手法

歴史的意義

- 19 世紀イタリア・オペラの伝統を継承していること
- ヴェリズモ・オペラとの関連
- 同時代の新しい和声や管弦楽法を取り入れていること
- 19 世紀から 20 世紀にかけてのイタリア・オペラを代表する存在であること

(4) J.S. バッハのカンタータ

音楽的特徴

- 合唱、レチタティーヴォ、アリア、コラールなどを組み合わせた構成
- 聖書や教会暦と結びついた宗教的内容
- 高度な対位法的書法
- ドイツのコラールの活用
- イタリアの協奏曲やアリアなど、異なる音楽様式の統合

歴史的意義

- ルター派の礼拝と密接に結びついて作曲されたこと
- ライプツィヒ時代を中心に多数の教会カンタータが作曲されたこと
- バロック時代のプロテスタント教会音楽を代表する重要な作品群であること
- 当時のさまざまな音楽様式を総合したこと

(5) ショパンの性格的小品

音楽的特徴

- ノクターン、マズルカ、ポロネーズ、バラード、スケルツォなど多様なジャンル
- 歌うような旋律と装飾的な書法
- 半音階的進行、転調などを生かした独創的な和声表現

- ピアノという楽器の特性を生かした、分散和音や広い音域を用いたフレーズや伴奏
- マズルカやポロネーズなどにみられるポーランドの民族的要素
- ピアノの演奏技巧と詩的表現の融合

歴史的意義

- 19 世紀におけるピアノ音楽の発展に著しく貢献したこと
- 様々なジャンルの小品、練習曲や前奏曲を高度な芸術作品へと昇華させたこと
- 後世のピアノ音楽や和声表現に影響を与えたこと

(6) ドビュッシーの鍵盤作品

音楽的特徴

- 《版画》《映像》《前奏曲集》などの主要作品
- 全音音階、五音音階、教会旋法などの使用
- 平行和音など、従来の機能和声にとらわれない和声法
- ペダル、音域、音型などを活用した多彩な音色表現
- 視覚的なイメージや情景を喚起する音楽表現

歴史的意義

- 従来の調性や機能和声とは異なる和声や音響の表現を開拓したこと
- ピアノを色彩的・音響的な表現媒体として発展させたこと
- 19 世紀までのピアノ音楽とは異なる新しい表現の可能性を示したこと
- 20 世紀の和声、音響、ピアノ音楽の発展に大きな影響を与えたこと

**出題意図**

主要な作曲家と作品ジャンルについて、その音楽的特徴を具体的に説明するとともに、それが西洋音楽史の中でどのような意味をもつのかを理解しているかをみる。作品や作曲技法についての個別的な知識と、時代・様式の変化を関連づけて論述する力を評価する。

## 4. 音楽史に関する論述

以下は、解答として想定される主な事項の例である。これらすべてを網羅することを求めるものではなく、主要な作曲家や作品の実例を挙げながら、歴史的な展開について適切に論述されていればよい。

**解答例**

(1) 管弦楽における標題音楽の発展

解答として想定される主な事項

- 文学、物語、自然、情景、思想など、音楽以外の内容と結びついた音楽であること
- 標題的な音楽表現は以前から存在したが、特に 19 世紀のロマン派において大きく発展したこと
- ベートーヴェン《交響曲第 6 番「田園」》などに、19 世紀の標題音楽につながる重要な先駆的例がみられること
- ベルリオーズ《幻想交響曲》において、具体的な物語と音楽が結びつけられ、固定楽想などの手法が用いられたこと
- リストが交響詩というジャンルを確立し、《前奏曲》などにおいて文学や思想と管弦楽を結びつけたこと
- スメタナ《わが祖国》などにみられるように、標題音楽が民族的な題材や自国の歴史・自然の表現とも結びついたこと
- リヒャルト・シュトラウスの交響詩において、大規模な管弦楽法や高度な描写的表現が追求されたこと
- 標題音楽の発展に伴って、管弦楽の規模、音色、表現技法が拡大したこと
- 19 世紀において標題音楽が重要な管弦楽ジャンルの一つとなったこと
- 絶対音楽との対比や議論を含め、19 世紀の音楽思想とも深く関係していたこと

(2) 鍵盤楽器における変奏曲の発展

解答として想定される主な事項

- 一つの主題、旋律、和声進行、低音などを基礎として、さまざまな変化を加える「変奏」という作曲原理について理解していること
- 変奏曲が時代や作曲家によって、鍵盤楽器の演奏技法や作曲技法の発展とも密接に関係し、装飾・リズム・調性・性格・主題の構成要素そのものの変容など、多様な変奏技法が用いられてきたこと
- ルネサンス期から鍵盤音楽において変奏の技法が用いられていたこと

- バロック時代には、シャコンヌ、パッサカリアなどにみられるように、一定の低音や和声進行を基礎として反復・変奏する技法が展開されたこと
- バロック時代に、主題、低音、和声構造などをもとに、カノン、フーガなどの技法を取り入れた対位法的変奏が発展したこと
- 古典派の変奏曲では、主題の基本的な構造を保ちながら旋律や伴奏を変化させる装飾的変奏が広く用いられたこと
- ベートーヴェンは、特に《ディアベリ変奏曲》において、テンポ、拍子、調性、リズム、テクスチュアなどを大きく変え、主題に異なる性格を与える性格的変奏を発展させたこと
- ロマン派では、シューマン《交響的練習曲》やブラームス《ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ》などにみられるように、変奏技法が作曲家の独創的な表現と結びついたこと

**出題意図**

西洋音楽史における基本的な概念を理解し、その歴史的な発展を時代の流れに沿って把握しているかをみる。また、主要な作曲家や作品の具体的を適切に挙げ、音楽史的な展開を論理的に記述する力を評価する。